

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 31日現在

機関番号：12604

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2012

課題番号：21720014

研究課題名（和文） 後漢経学の基礎的研究

研究課題名（英文） A Basic Study on study of Confucian classics in Later-Han Period

## 研究代表者

井ノ口 哲也（INOKUCHI TETSUYA）

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：30376842

## 研究成果の概要（和文）：

本研究では、後漢時代の『孟子』とその注釈に関してその固有の特徴やこの当時における位置づけを考察したほか、特定の『尚書』の文言をとりあげた経文の継承に関する問題や、経書の要が『易』から『周礼』へと移ったことの二重の意味、すなわち鄭玄がなぜ『周礼』を経書の核に据えたのか、そして経学の『易』が玄学の『易』へどう変貌していくのか、という問題について、基礎的な研究をおこなった。

## 研究成果の概要（英文）：

In this study, I considered the specific characteristics and the position of this period on *Meng-zi* (孟子) and the notes in Later-Han period. In addition to this, I made a basic study on the traditional of wording in Confucian classics through particular wording of *Shang-Shu*(尚書), and on the pivot of Confucian classics that moved from *Yi*(易) to *Zhou-Li*(周礼), namely, Zheng-Xuan (鄭玄) why set *Zhou-Li* in the center of Confucian classics, and *Yi* of Confucian classics how change to *Yi* of dark learning(玄学).

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：中国哲学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：後漢、経学、中国哲学、注釈。

## 1. 研究開始当初の背景

後漢経学の研究は、経書を中心とする古典に付けられた膨大な注釈を丁寧に読み解いていく作業が必要であり、かなりの時間と労力を要するため、従来さほど研究が進展していなかった。古典に対する注釈は、古典の本文を正確に理解するための一つの便宜であ

るとされてきたにすぎない。そのため、これまでは、当時の注釈に着目して、それを仔細に分析し、そこに注釈者の思想を読み取ろうとする研究は、ほとんどおこなわれてこなかった。

## 2. 研究の目的

本研究は、後漢時代に盛んに行われた古典への注釈という営為に着目し、注釈を丁寧に読み解いていくことによって、これまでほとんど論じられてこなかった注釈者の思想を浮かびあがらせることを目的とした。同時に、後漢経学の核となっていた経書に着目し、その経書が台頭したことの意味を追究した。

## 3. 研究の方法

本研究の初年度にあたる平成 21 年 (2009) 度に必要な情報機器を買いそろえ、これを用いて、4 年間の研究期間中に、経学関係の研究資料や関連情報を機能的に整理することにつとめた。この作業と並行して、後漢経学に関する一次資料を丁寧に読み解いていくことに力を注いだ。具体的には、これまであまり検討されてこなかった『孟子』注、そして後漢経学の研究を進めるうえでの必読文献である『漢書』藝文志や『周礼』の本文と注に着目して考察を進めた。

国内においては、いくつかの規模の大きい学会で口頭発表をおこない、学術雑誌・論文集・紀要等に論文を発表するなどして、本研究の研究成果を発信していった。

また、国外においては、日本では容易にできない研究活動として、中国大陸でのいくつかの国際学会での口頭発表の機会を通じて現地の研究者と意見交換することを実現し、その一部は、中国語で執筆した論文を中国大陸の学術誌に発表するに至った。

## 4. 研究成果

4 年間の研究期間を与えられた本研究の研究成果は、以下のとおり三点に代表される。

### (1) 『孟子』とその注釈について

『孟子』の注は、趙岐によるそれが、今日まとまって伝わる最古の注として、『孟子』を解釈する際に重宝されてきた。後漢時代には趙岐注以外にもいくつかの『孟子』注がつくられたが、それらは散佚し、今日断片的に伝わるのみである。それゆえ、まとまって伝えられた趙岐注がこれまで重宝されてきたのは当然なのであるが、しかしそれでは、趙岐注ばかりがクローズアップされてしまい、趙岐注を後漢時代における『孟子』注の一つとして当時の学術的文脈の中で正しく捉えることができなくなってしまうのではないか。以上の問題意識に基づき、前漢時代から後漢時代へ至る『孟子』の展開を確認し、『孟子』のテキストの問題に検討を加え、後漢時

代における『孟子』とその注釈の学術上の位置を考察した。

趙岐「孟子題辭」によれば、趙岐は、当時盛んに行われていた五経の注釈を手がけてもあまり意味がないと考え、むしろ手つかずに近かった『孟子』を解釈することのほうを選択した。すなわち、後漢時代に『孟子』注が著されたことの一つの理由は、その注としての存在意義にある、ということである。同時期の『淮南子』や『呂氏春秋』への注釈の意義も、同様の事情にもとめてよいのかもしれない。同時に、それは『孟子』が儒家のテキストとして五経の影で埋没してしまわないための、『孟子』それ自体の存在意義を示すための営為でもあり、それゆえに特に後学へ向けて注をのこすことが考えられたのである。この考察は、「後漢時代における『孟子』とその注釈」(『後漢経学研究会論集』第 3 号、2011 年) に結実した。

### (2) 経文の継承について

『論語』憲問篇には『尚書』の「高宗諒陰三年不言」という文言が引用されている。この文言は、後漢時代には常套句として受けとめられた。『尚書』のこの文言がなぜ常套句となったのかをつきとめるため、後漢時代あたりまでに時間を区切って、その変遷と文言の意味について考察した。

実は、「高宗諒陰三年不言」は、『論語』に『尚書』の文言として引かれるものの、現在の『尚書』には見当たらない文言である。では、これは本当は『尚書』の文言ではないのか、というと、そうではあるまい。多くの古典にこの文言の不完全形が引用されていることが、『尚書』中に確かにこの文言があったことを示していよう。そこで、後漢時代に至る一次資料に引用されるこの文言を限なく調査し、一例ずつ検討した。その結果、この文言は、『論語』に引用されたことにより、本来の出典である『尚書』を離れ、出典の示されない文言として独り歩きし、やがて人口に膾炙した常套句として引用されるようになった、ということが分かった。『論語』は初等段階の学習で暗誦されたため、多くの学習者の基礎知識もしくは教養として社会に共有されていった。そのため、この文言についても、『論語』に引用されたことで多くの人々が知って用いる常套句となり、多くの古典に引用されるに至ったのではあるまいか。この考察は、「高宗諒陰三年不言」について」(『中国文史論叢』第 8 号、2012 年) に結実した。

### (3) 『易』と『周礼』について

劉歆(前 53 頃～後 23)の『七略』を踏襲した後漢前期の班固(32～92)の『漢書』藝文志は、その六藝略において、『易』が他の

五経を統べる構造になっている。前漢末期に前漢末に諸経の中から『易』が台頭したのである。しかし、後漢時代、『易』を核とする経学の構造に変化が生じる。後漢後期の鄭玄（127～200）が、『周礼』を経学の核に据えたのである。この、『易』の台頭から『周礼』の台頭への移行について、考えねばならないのは、次の二つの問題である。すなわち、一つは、なぜ鄭玄は『周礼』を経学の核に据えたのかという問題であり、二つは、『周礼』にとって代わられた『易』はどうなってしまったのかという問題である。

考察の結果、前者については、後漢の都である洛陽が『周礼』の描く周公の都の洛邑を継承する直系の都であり、そこが『周礼』の世界そのものであったとするならば、その時代の人として、鄭玄は『周礼』をどうしても意識せざるを得ない状況にあったこと、そして前漢時代に登場した『周礼』は他の経書に比べて経学においては新機軸であったこと、これらが『周礼』の台頭を招いた原因である可能性を指摘した。また、後者については、『易』は『周礼』にとって代わられたあと、いわゆる鄭玄の「周礼体系」で一つの経書として組み入れられたが、後漢時代が終わり、経学に代わるイデオロギーが必要とされて『老子』が表舞台に現れた時に、『老子』との親和性が強い『易』が、漢代の儒者の手垢をすべて剥ぎ落した本来の『易』として、玄学のテキストの一つとして再浮上したことを論じた。

この考察は、「關於《周礼》的出現与其台頭」（国際儒学論壇・2011—“儒家的修身处世之道”一、2011年12月4日、中国人民大学）という口頭発表の機会を経て、『易』の台頭から『周礼』の台頭へ（覚書）（中央大学文学部『紀要 哲学』第54号、2012年）、「間嶋潤一著『鄭玄と『周礼』一周の太平国家の構想一』（『新しい漢字漢文教育』第54号、2012年）、「経学の『易』から玄学の『易』へ」（『林田慎之助博士傘寿記念 三国志論集』、2012年）の3篇に結実した。

以上の（1）（2）（3）の三つが本研究の核心であるが、これら以外にも、これまで多くの議論が積み重ねられてきたいわゆる「儒教の国教化」に関する日本の研究状況への提言や、後漢時代の顔回像の検討などまだ緒についたばかりで今後の研究につながる考察などに取り組み、4年間の研究期間において、論文10篇と1冊の研究成果報告書を公にし、国内外で9度の口頭発表をおこなうことができた。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計10件）

- ① 井ノ口 哲也、「大久保隆郎著『王充思想の諸相』」、査読無、『成城大学 共通教育論集』第5号、2013、P1—6。
- ② 井ノ口 哲也、「経学の『易』から玄学の『易』へ」、査読無、『林田慎之助博士傘寿記念 三国志論集』、2012、P43—57。
- ③ 井ノ口 哲也、「間嶋潤一著『鄭玄と『周礼』一周の太平国家の構想一』」、査読無、『新しい漢字漢文教育』第54号、2012、P99。
- ④ 井ノ口 哲也、「高宗諒陰三年不言」について」、査読無、『中国文史論叢』第8号、2012、P1—8。
- ⑤ 井ノ口 哲也、『易』の台頭から『周礼』の台頭へ（覚書）」、査読無、中央大学文学部『紀要 哲学』第54号、2012、P41—53。
- ⑥ 井ノ口 哲也、「渡邊義浩著『後漢における儒教國家の成立』」、査読有、『史学雑誌』第120編第9号、2011、P77—85。
- ⑦ 井ノ口 哲也、「後漢時代における『孟子』とその注釈」、査読無、『後漢経学研究会論集』第3号、2011、P119—152。
- ⑧ 井ノ口 哲也、「顔回素描—『論語』と『史記』から—」、査読無、『成城大学 共通教育論集』第3号、2011、P160—172。
- ⑨ 井ノ口 哲也、「完成使命的《儒教国教化》学説—圍繞日本学者的議論—」、査読無、『儒学的当代使命：紀念孔子誕辰2560周年国際學術研討會論文集』卷3、2010、P3—6。
- ⑩ 井ノ口 哲也、「『史記』『漢書』と漢代思想史研究」、査読無、『成城大学 共通教育論集』第2号、2010、P165—175。

〔学会発表〕（計9件）

- ① 井ノ口 哲也、「後漢時代における顔回像」、中国出土資料学会平成24年度第1回例会、2012年7月21日、流通経済大学新松戸キャンパス（千葉県松戸市）。
- ② 井ノ口 哲也、「東漢時期《尚書》的習

得與傳授」、国際《尚書》学会第1回学術研討会、2012年4月21日、金楓大酒店（中国・湖南省長沙市）。

- ③ 井之口 哲也、「關於《周礼》的出現与其台頭」、国際儒学論壇・2011—“儒家的修身处世之道”一、2011年12月4日、中国人民大学（中国・北京市）。
- ④ 井之口 哲也、「關於《莊子》中的顏回」、国際儒学論壇・2010—“儒家思想与社会治理”一、2010年12月5日、中国人民大学（中国・北京市）。
- ⑤ 井之口 哲也、「井上哲次郎之學術分類的当代意義」、紀念鶴山書院創建800周年国際論壇暨宋明理学与東方哲学国際学術研討会、2010年11月3日、鶴都家園酒店（中国・四川省成都市）。
- ⑥ 井之口 哲也、「王充的顏淵觀—圍繞對於顏淵之死的理解—」、第十一屆世界顏氏文化聯誼暨国学傳承与東亞經濟国際学術研討会、2010年10月10日、金牛賓館（中国・四川省成都市）。
- ⑦ 井ノ口 哲也、「後漢時代における『老子』思想の展開」、日本道教学会第60回大会、2009年11月7日、東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）。
- ⑧ 井之口 哲也、「五經与讖緯」、儒家文化与青年精神国際学術研討会、2009年10月31日、重慶信息技術職業学院（中国・重慶市）。
- ⑨ 井之口 哲也、「完成使命的《儒教国教化》学說—圍繞日本学者的論議—」、紀念孔子誕辰2560周年国際学術研討会、2009年9月26日、中国職工之家酒店（中国・北京市）。

〔図書〕（計1件）

- ① 井ノ口 哲也、東京学芸大学教育学部井ノ口哲也研究室、『後漢經学の基礎的研究』、2013、総90頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井ノ口 哲也 (INOKUCHI TETSUYA)  
東京学芸大学・教育学部・准教授  
研究者番号：30376842

(2) 研究分担者 該当なし

(3) 連携研究者 該当なし